何れが、預選歌になりそうか、御批評被下度候、』

いづれも〳〵、御名吟、結構至極と、申上げておきます、

すみ子

『榮えゆく御代の姿をこゝろにて

御垣の松は常盤なるらむ、

これは、大内の御花びら、少々ながら御福わけいたし候、小の分は、

光宮様、御誕辰の御祝のなり、御目出度う、御頂きなされませ……、』

げに、御花びらとは、よくこそ言ひつたへたるもの、紅白の餅の、薄く、平なるを、二枚重ねて、中には、午蒡に、味噌をぬりたるものを、あんの様に入れて、かしは餅の如くせるなり、その、色も、形も、さながら、花瓣の様に見ゆるこそなか〳〵にゆかしけれ、

さて又、その次は、ずつと俗にくだけるもの！、

『新年おめでたう御座います、……あなたは、御雑煮を、いくつ、召し上りましたか？、相變らず、胃の腑丈は、御壯健の事と存じあげます、今年は申のとし歌がるたに、生傷つくるも、夢中になつて、眞赤な顔して、キイ〳〵いふも、丁度ふさはしう御座いませしよう、御地の仙境には、此快戰が御座いましようか、此地まで、遠征に御出かけ遊ばせな、猿面冠者にあやかつて、大將軍にして上げますから、……御きげんよう、

くま子』

姫御前、公達の御正月は、さぞ御にぎやかな事でしよう、

『まづ、明けまして、御目出度う！、

年末には、「新人」（梁川氏弔慰號）を、御送り下さいまして、有り難う、御座いました、綱島さんも、とう〳〵、理想の國へ御旅立になりまして、御目出たいのか、おいたはしいのか……、あなた様は、いつ、御出立になります！、私は、その名の通り、千代も、八千代も、雲と、岳との、あらん限りは!!!、

去年は、椋鳥さんが、博士になられたる爲め、同氏發明の枇杷酒を、たんと、御もらひになりましたらう、其外、あなたの事だから、たんと、徵發令を御下しになりましたらう、ほんに、貴姉は、羨ましい、境涯の方よ、

雲岳女史』

如何ですか、一度、お互に、境遇をかへて見ましようか、そんなに、餘所で御覽になる程、氣樂でもありませんよ、

『其後、さつぱり、お便りがありませんが、冥土へ出立の御準備が御忙がしいのであるまいかと、案じて居ります、三保の松原は、よい所でしようから、冥土行は、暫く延引なさいよ、どんな新年をお迎へになつたか、知らせて下さい、當方、陸海軍共に、無事!!!、

北國司令官』

軍艦、大砲を引き連れての、北の國のさすらひ、まあ御元氣で結構〳〵、

『謹賀新年

梅原兄、一昨三十日死亡す、大姉にも、死後の御覺悟大切に御座候、不盡、』

梅田謙敎

まあ、どうしたのでしよう、梅原さんからは、チヤント活版摺で、

『謹賀新正

明治四十一年一月元旦　私立中央商業學校……

主監　梅原融』

といふ賀狀が、元日に來て居りますのにネ、つまり、年始狀を、早く特別取扱ひに投函されたのでしようが、あまり手廻しがよいと、妙な現象を生じて來るものですネ、梅原さんは亡夫の、親しいお友達で在つたのに、さりとは、御氣の毒な事をしましたワネ、

これにつけても、私達の樣に、死にかゝつた病人は、あまり、手廻しのよい事をするものではないと、しみ〳〵おもひましたよ、

一體、全體、御めでたい年始狀に、妙に、死だの冥土だのといふ、言葉が交つて居るのが、多い樣ですが、次の一通も。また、お墓に緣のあるものです、

『富士をながめがてらの、御雜煮、御手製なりとも、嘸おいしかるべくと、新年早々、御許樣羨しくぞんじ候、兄のお墓參りも宜しく願上ます、お墓と云へば「新公論」の「龍華寺詣」に、私の手紙を、其儘御掲載とは、恐縮いたしました、あれでは私は墜子の蔭から、亡兄は草葉のかげから御恨み可申候、……私はまだ病の神に囚はれ人、からす越しに、日の光なつかしむ身を、かこち申候、……例の雜誌に、火かげの君の名歌あり、心躍るばかり嬉しく候、乍去、彼君は別天地の人、唯々、及ばぬ才の恥かしくのみ覺え申候、近日中、御送り可申候、

上り來る朝日の影に消えて行けよ
御庵とざす峯のうきくも、

雲は西流れは東分れゆきて、
また遇ふ時をおゝ誰か知る、

さびしきまゝに、歌などかきつけ申候……、

野の人』

詩人の年始狀は、なんと、優にやさしきものならずや、乍去、野の人とは、野生の人の意味！、此先生、日頃、天然が大のお好き、とんぼと話がしたいの、雲と睦言をかたりたいのと、それは〳〵、眞顏で云うて居られます、食物でも何んても、豆とか、お芋とか、天然を損ぜぬ、其儘のものが御好きといふより、まるで野に育ちし人の樣だとて、名け上げまゐらせたるなり、

『賀正……小生、今、三崎海岸の小丘に、チト、時代後れに候へ共、漱石氏の「漾虛集」と、「明治俳句集」と、少々八釜敷候へ共、「改正刑法」の條文と、原稿用紙とを携へて、蹲踞致し居候、(斯く列記せしは、ペンと、インクとを携へ居

る事を明かす爲に候、予は目下〇〇〇〇〇の著述に志し居り候へ共、長續させぬ小生の事故、完成するや否、期し難く候)、フト眼を放つて、眞正面に富士を眺め、右に箱根、左に天城連山を望み、瞑想す、空想す、夢想す、天城連山を除き去りて、姉上と相對し、長日月の疎音を、無造作に罵倒されなば少しは心安かるべしと……

何事もあきらめて居る冬籠り、

これは、故子規君のを、一寸かりたのですが、此繪はがきは當地歌舞の島の、實景に御座候、

恐々居士』

『先年一度の引導が縁となり、毎年お正月には、〇〇家へ行つて、御馳走になります、これ偏に、姉上に感謝せざるを得んです、

藝あれば猿も正月小袖かな、

『一年中、元日の様な、清淨な心でありたいとは、毎年年頭の所感に候へ共、三日經、五日過ぐる間に、次第〳〵に俗な穢はしき心の湧き來ること、自分ながら腑甲斐なく存候、今年は、どうか、少し長持ちさせたきものに候、……

……端息道人』

『御手紙は、縣廳から廻つて來て、拜見致しました、近日中に、御年始ながら遊びに參ります、一ッ、若がへつて、かるた合戰でもしませうか、……小生事は、都は離れて居りましても、苟くも、勿體なくも、天下の直參でして、縣廳の役人の如き、陪臣ものゝ、國武士と混同されては、大に男子の沾券が下りますから、爲念、一寸申上げて置きます、！　エヘン、エヘン、

章魚入道』

御料局技師』

おや〳〵、どうも、とんだ粗忽をして、失禮致しました、

『お正月と相成候へ共、今年は、ノートに羈束せられ、シケン痛にて、足腰不自由の境涯、いつもの如く、高飛びも出來ず、殘念に存じ候、本年は、いよ〳〵屑書云々とは恐縮の至り、近き將來に於て、自分の腕で、飯を喰はねばならぬとおもへば、從來の如く、冥想的怪氣焔も吹かれざるべくと、心細く感じ申候都合に依りては、貴寺の小僧にても、御願ひするかも不知候、……或る程度まで、金持ちたく候、金持ちて、氣焔を吐きたく候、然らざれば、沈默の生涯か、ア、!!!、

興索生

御名の如く、興味索然たるものにはあらで、御手紙は、たしかに、興味津々たるものに御座候、

『謹奉賀新正　明治四十一年元旦

藤井宣正殿　辯護士　法學士　清水市太郎』

このはがき、昨年も參じました樣におもひますが、配達人が私の内になげ入れるのが、おかしいては御座いませんか、どうかして、屆けてくれると、きめた所が面白い事！、

この清水樣といふ方は、まだ藤井樣が、この世に生きて御出ての事と、信じて居らつしやるのですネ、仕合せな方ですこと、私、そうおもひますワ、何でも、信じて居る時が、一番樂しい時でしようと、譬へば、あの人は、親切な人だと信じて居る間こそ、一番、平和な時で御座いましようよ、

ですもの、藤井樣は、御かくれになつたと知れば、この方も、あゝ惜しいとか、なさけないとか、おもひになりますワ、そんな悲しいことしらずに、まだ、世に居らつしやるものと、おもひつめて〳〵、しぬまで、そうおもつて居らつしやれば　このかたは、幸な方で御座いますワ、外から見れば、まあ可愛想に、まだしらずに御出てだと、思ひますけれども、神樣や、佛樣だつて、此世に在つて、自

分を、守つて下さる、救つて下さると、信じてさへ居れば、その人は幸福ではありませんか、加藤弘之さんのやうに、神様や、佛様は、昔のひじりの造言て、實際は、この世にないものだと一概に云つて仕舞へば、世の中が、あんまり、無趣味になつて仕舞ふてはありませんか、お醫者様や、お藥は、達者なかたには、無用な長物かも知れませんけれど、病人には、やはり、大切ですからネ、人間が、みんな、知識の勝れた迷ひのないものに、成つて仕舞へば兎に角、煩惱といふ心に病氣を背負つて居る以上、やはり、信仰だつて入用てすわネ、ネー、そうては、ありませんか、……御幸の濱の蜑の子、

清水氏は多分、學士會のふるい名簿でも見て、無意識にかゝれたるものでしようが、たつた一枚の間違つたはがきから、こんな福音を得たとは、戊申新春に於ける、意外な獲物で在つたと、猿が山中で、栗の實を拾つた以上の、よろこびて御座います、が、併し、すてに、死んだ人から（梅原兄のもの）年始狀が來たり或は、また、五年も前に死んだ人へ宛てゝ、賀狀が舞ひ込んだり、だん〳〵、人世が進化して來ると、到底、猿猴の世界などては、想像もつかぬやうな、妙な現象が出て來ることゝ、ひたすら、驚歎に堪へない譯てす、……どうも、御退屈さま……、（明治四十一年）

夏雲

此頃のあつさに何をするといふ元氣もなく、怠屈まぎれに例の反古さがしを致しましたから、屑籠展覽會と出かけましようか……呵々、

京の人

『今京に着いた、途中山崎から舟て渡つて、岩清水の八幡に詣でた、舟から京の山を見た景色は、何ともいへぬ程美しかつた、

大和路にむらがる夏の雲を見て

眞ひるてる日に淀の川くだる』

K生

次のも、やはり京都より、

『餘り暑いので、プット膨れて京都まで來ました、さすがに、京都の山と美人はすばらしいもの……、序に、奈良見物もとおもへど、石炭なければ、運般も六ヶしく、一層の事、鐵道ばかりでなく、この身體も、國有にして欲しいものだ……、』

御互に遊手徒食の民は、みんな國有ではないかと、一寸、可笑しくなり申候、

紺衣の人

『駿河灣頭、風清く、波靜かなる所、世塵を離れて、日を送り給ふ事、羨望の至りに御座候、小生事、身體は、幸に健かに候へ共、心の方は、なか〳〵それに伴はず、相變らず圓頂紺衣の大凡夫に有之候事、我ながら、恥かしき次第に御座候、唯、日々、子供相手に遊戯致し候位が、報謝の業にて、他には何事もなし得ず、誠に述懐の至りに御座候、』

現代の青年、口を開けば修養を云ふ、而かも、口舌三寸の行と、机前の冥想とは、尊敬するに足らず、今紺衣の人の如きは、自から立つて幼學園を設け、生身の地藏菩薩として、實行實證するの人、眞に畏敬すべきなり、

輕井澤にて　松風閣主人

『清見潟も、近頃はなか〳〵の御暑さの由、夏しらぬ輕井澤人は、御氣毒ながら御推察致しかね候、たとひ如何なる原因ありとも、當地へ御出むき相成り候はば、萬事御不自由無之樣御待遇可仕、清涼なる空氣を吸入せられて、充分の英氣を養ひ給へかしと、切に御勸め申候、

ゑんどう飯、　岩肴フライ、

鯉のこく汁、　キャベッの漬物、

右は御出の節の、献立表に御座候、早々、』

献立表まで、御添へ下さらずとも、行きたきは山々ながら、今年ばかりは、どうもその……、

中禪寺湖畔にて　M、H、兩人

『久しく濱の子の仲間入りして、膚も大分よき色となりたれば、今度は、少し趣向を變へて、日光の山奥に、朝夕寒翠を吸ふ事と相成り申候、舟遊びに、山登りに、なか〳〵興は盡き不申、たゞ、雨の日多きには閉口、今日も終日雨ふり暮し、湖影も濃霧にかくれて見えず候、それでも、雨中にボートを漕ぎ出すなどは一入一興に御座候、明日もまた雨なれば、勇氣を鼓して、深林幽谷を跋渉し、人の知らぬ絶勝を探らばやと存候、四五日滯在して、再びもとの濱の子に立ちかへり可申候、』

つとめて、休暇を利用して、よく遊び給ふこそ、よろしかるべけれ、

放水生

『暑中休暇は、生等の黄金時代で、同時に治外法權だとおもひます、ブラウニングや、テニスンが、來い〳〵と呼んで居る、メレヂスや、スウインバーンが、讀め〳〵と聲をからして居る、林間釣床の上で、メーテルリングでも繙いて居ると、どんなに愉快でしよう、……今、佛語を一生懸命にやつて居ます、』

いたづら坊チャンも、いつの間にやら、色々の名家の名を覺えられたものと感心致しました、

箱根御殿場にて　A生

『……當地日中も七十五度を上る事なく、夜は夜具一枚にては、寒さを覺候位、試驗間際までは居るつもり、但し、雨の日多きには閉口、御殿場の雨とて、有名のものゝ由、尚、もう一つは、富士登山者の多くて騒々しきにも閉口、好奇心と虚榮心にからるゝ登山者の、うるさき程、生等が寓居の前を過ぎ行き申候、

中にも、若き婦人、殊に女學生などの心理を解剖すれば、歸りて、同窓者にほこらばやといふより外、何もこれなかるべく候、……講中などのは、信仰上からなれど、紳士淑女に至つては、只流行を追ひ、好奇心に驅らるゝのみと存候……、』

とんだ所で、女學生の心理解剖をなさつたものですナア、こんな心理學も、高等文官試驗に入用なんでしようか、呵々、

須磨にて　如空道人

『炎暑の折から、御障りもなかるべしと、此方にて極め居り候、野生等は、須磨の浦浪打寄する所、五色の夕映を浴びて、水泳の快を貪り居り候、

土用中鰻を喰つて腹こはし、
冷藏の魚羨まし暑さかな、
羅漢連五百どころか夏の海、

鰻を喰べる樣な羅漢樣では、とても成佛は、六ヶしいでしよう、

三角生

『小生も此頃須磨にあり、當地もなか〳〵あつい！、

よろこびは一本たてる白百合の
花にそよげる風なりしかな、
遠雷や柳河原に風起る、

これは詩歌句會に出品したものだ、』

道後道人

『九十度餘の暑さには、定めし御弱りなどゝ、自ら健人ぶつて、御見舞申上候、

暑をさけて島に遊ぶやたそがるゝ、
世の中を茶にしてくらすも面白し
方丈の天地に松風の聲』

北越將軍

『久しく御無沙汰致しましたが、貴姉よりも一向おたよりなく、差引勘定〇と相成り候へば別段御詫にも及ぶまじく候、

西比利亞の風ふきやみし夕凪に
少女等つどひ海にいるめり、
金色の海をながめてほゝゑみし
すぎし昔のなほしのばるゝ、

生等、今加賀國金石の海水浴場に在り、』

治彦

『いよ〳〵閑散の身と相成り候につき、夫妻同伴にて、御邪魔に出かけ可申、人の都合などは、よくても、わるくても、押しかけて四五日中に參上致すべく候、定めし、御涼しい事でしょう、

萬事は、其折を期し申候、おもへば、過去十年間、人の子を誤りし罪ほろぼしに、諸國巡禮の後、再び父祖傳來の、農民に立ちかへり候つもりに御座候、』

近頃の文部省のやり口に愛想がつきて、教員たる事をやめるのですとさ、

をかしや笑史

『治彦君、御滯在の由、ゆる〳〵觀光の事、望ましく存候、富士は駿河で見るを天下第一とし、駿河の内にても、清水附近は、尤も絶佳なる事と奉存候、……序ながら、ちよつと酒八景といふものを御紹介申上げ候、治彦君と御同覽被下たく候、

1　麥酒の夜雨、　2　香の山の明月、
3　焜爐の夕照、　4　杯洗の落雁、
5　酒伴の歸帆、　6　絹漉の暮雪、
7　獨酌の晴嵐、　8　おてこの晩鐘』

こんな事を研究して居ても、釀造學の博士になれるとは、いさゝか呆服の至り！、

仙界山人

『今朝來、つく〳〵庭上を眺めやれば、何となく、面白味なきにあらず、依つて、取あへず、僕が書齋の七景を作つて見た、

一　岩上古祠、　二　臥龍根、
三　象頭巖、　四　印月池、
五　屏風岩、　六　滿月燈、
七　書屋雨、

行く〳〵は、知人の詩歌を集めたいのであるが、貴姉にも、吟詠の榮を分與するから、何かよこし給へ、寒山の詩に、

家住綠巖下、庭蕪更不芟、新藤垂繚繞、古石竪巉巖、
山果獼猴摘、池魚白鷺啣、仙書一兩卷、樹下讀喃々、

まあこんな所だとおもひ給へ、』

御仙居、さこそとぞんじ上候、乍去、榮の御分與は御容赦願ひ度候、

雨田頑爺

『此五絕の拙作は、去る頃耶馬溪羅漢寺にて賦したる野調なり、五百羅漢も、これには、呆然自失の態あり、こゝが、一嘿、雷の如き所か、呵々、

寺聳白雲嶺、鐘傳綠水邊、半千羅漢有、咄盍拍吾肩、』

切に御頑健を賀す、

潮風

『先日は參上、半日の清興に、田舍の面白味を覺え、自分も小さな庵室がほしくなり申候、此頃は、外出も致さず、家にて、藥草喰品を誦するのみに候、』

草ぶかき庵の御來訪に、清興などゝは、却つて恐縮千萬……、

しづ子

『かねて、御約束の御影像、御送り下され有り難く拜受、

御影拜み解脱せばやとおもひきや
　解脱はせずていよゝまよひぬ、
一超直入蓮子飛びけり一年の
　たゆたひ心めゝしき心』

なを子

『其後は、音信不通と御規則御改正に相成り候にや、たまには、御なつかしき筆のあと拜見致し度、清見潟の波と共に、靜けく暮し給ふ御身には、極暑中にも、尙且、塵の巷に在る身の、いかに忙がしきかを知り給はじ、誠にはや、生存の意義も、何も無之事に候、よろしく御推察下され度候、』

繁忙と閑寂と、サア!!、どちらに、眞の生存の意義が在りましようかね、

ふぐ子

『近頃の暑さに、御愛養のブラ〻君の、御機嫌は如何てすか、私の家でも、近頃大に發展致しました、

今日もまた百の玉子を金にかへて
　親なき子等の家をとはゞや、

告水生

期待丈は、立派ですが、なか〳〵成功せず、美事失敗、……』

私の家のは、至つて元氣です、

『吾等、一日確氷を越え、二日淺間を攀ぢ、三日草津に着、更に榛名に向ふべく候、淺間山頂歌あり、

意を強うするに足りけり山も雲も
　見さはむ限り我が國にして』

淺間山から見た眼界線位に、滿足する樣な事では、少々心細い譯ですね、

四〇二

野狐禪坊

『近頃の極暑を、どんなに凌いで居らるゝか、狹き洞庵は、さぞ暑からうと、同情に堪へず、僕は、愈、八字髭を剃り落し、平凡なる田舍坊主と化け、野狐の本分を發揮し、殊勝らしく讀經し、葬式を勤むる事二回とは、大につとめたりといふべし、併し、五丈餘も高き建物の北窓に、蛇禪三昧に入る時は、寢卷を被らずには、安心して寢られぬ位涼しい、洞山無寒暑とは此所である、』

御附女中

『先日のかへるさには、實におもしろく候ひき、汽車中にて、御主人樣と、御客樣方との、狂言、淨瑠璃、をどり、謠曲、唱歌、實に〳〵をかしく笑ひの中にいつしか、東京に着き候ひき、此段内々ながら、御報申上候、』

右を知らぬ顔で、早速一行の連中へ、スッパ抜いて上げると、直に返事あり、

紳士淑女連より

『汽車中云々の件は、事實にて候ひき、先方より、音樂家二三名乘り込み、徒らに永き時間を、居眠りに過し候も愚なる事よと、オペラを初め、文明的のダンス、ソロー、賑々しさに、時の立つを忘れ申候、ソンジョソコラの、田舍者に見せてやりたき程なりき、紳士とか、淑女とかの旅行には、又格別な趣向ありと御承知被下度候……、』

一行の狂態、これもやつぱり、陽氣の爲てしようか、イヤハヤ呆れ果て申候、今度はこれでおしまい、いづれ又、其内に、さよなら〳〵、（明治四十二年）

追懷

本願寺御裏方を追悼し奉る

去んぬる一月廿七日、突如として、一大悲報は傳はりぬ、

「本派御裏方御逝去ましませり」と

嗚呼、何たる意想外の凶音ぞや、あまりの悲しさいたましさに、我は只、稍暫くは、夢見る心地にてありき、

これより先き一週日、京都より來れる一知己は、御裏方の御病勢の、今やまさに容易ならぬを語りぬ、されどわれは、如何にしても、その御生命の、旦夕に迫り給ふものとは信ずる能はざりき、御裏方は、芳紀正に三十、人世の最も強く健かなるべき御年齢におはしまして、如何に二竪に犯され給ふとも、そは、必ず御全快あるべきを信じたりき、嗚呼、されど、そは全く凡夫のはからひ心にてありし、知己の言を信ぜざるの過ちなりし、一月廿七日には、もはや、御遷化の確報は疑

ふべくもあらずなりぬ、

御本山の御裏方としいへば、親しく、その恩容に接せしと否とに關はらず、一山の門末の擧つて敬慕し奉る所、然るを如何なる宿世の因緣にや、我は御裏方のいまだ幼くましせし頃より、親しく御容姿に接するの折に逢ひ、數ならぬ身ながら、あまたゝび忝き御懇命を蒙る者の一人なりき、あはれ、敎外無緣の人々すら、御裏方の逝き給へりと聞きて、袖をぬらせしもありとかや、まして我等の歎き悲みを、いかでか心一つにつゝみ果づべき、

御裏方の御俗姓に就きては、今こゝに委しくしるさずとも、世の人のすでに熟知したまふ所、おもひぞ起す、今より二十年前、東京なる島地家の白蓮會堂に於て宗祖見眞大師の降誕祝賀會を催したる折にてありき、其頃、東京に御留學中なりし大谷文子姫（光瑞法主の令妹今の高田派の御裏方）を、白蓮會に御招待申さんとて、築地御殿に御迎ひに參りたる時なりし、折しも、築地別院へ御參詣中なりし九條家の幼なき姫君達をも、御附女藺の計ひにて、文子姫とともに御同伴御招き申上ぐる事となりぬ、我が始めて御裏方に拜謁せしはまこと此の時なりき、まだ垂髫の、いと〳〵いたいけなる姫君ながら、何くれと、よしありげにさとくふるまひ給ふとぞ見上げ奉りし、その姫君達の中、最も幼くましませし御妹君こそ、今は申すもかしこき、

東宮妃殿下にておはしますなれ、

白蓮會の降誕會は、非常なる盛會にて、餘興の福引には、姫君達も、いたく興ぜさせ給ふ御有樣なりし、

越えて二年、我は藤井家に嫁して京都にゆき、六條に參殿して、明如上人の御裏方（今の心光院殿）に謁見せし折、傍らに、二人の姫君達のおはしましけるが、御一人は、東京よりかへり給ひし文子姫にして、御一人は、即ち、婚約の姫君として、九條家より新たに入輿ましませし御裏方なりき、その時、母御裏方の、

「かく、にぎ〳〵しき姫達の、二人までも京都へ來ましければ、東京の女學校

（華族女學校の事）は、如何に靜かになりにけむ、」など戯れのたまひしほどに、姫君達もいたく打ち解けさせ給ひて、何くれの御物語ありき、其後、京都と、東京とにて、幾度か拜謁の折を得けむ、今はさだかにも覺えず、いつしか十年の月日の過ぎ去りて、明治三十六年に、我夫宣正の、海外にて死去せし忌明きの御禮に、われまた京都にゆき、本山の大奥に參りしに、此時は、もはや明如上人御遷化の後なれば、かねての姫君にておはしまさず、一山の御裏方として、門末の一寡婦に、正式の拜謁を賜はりたるなりき、されど、御言葉親しく、

「法主猊下の、いたく宣正の死を惜ませ給ふといふ事を、傳へさせ給ふと共に、もし寡婦となりて、行くに所なくば須磨に來て餘生を送れよ、」

との、添き恩命をも賜はりぬ、さては身にあまる有り難さをふかく感泣せしも、宿痾に病める身の、かゝる仰せごとにも從ひかねて、其年の冬より春にかけては、我も明石に靜養しければ、折々は、須磨なる御別莊へも御機嫌伺ひて、種々の御物語を承りぬ、一山の御裏方としての御抱負を承りしも此の時なりき、高山を跋渉し給ひし御あり様を承りしもこの時なりき、富士、高野、笠置の中にては、笠置こそ、歴史的にも、宗教的にも、最も感興を牽きたりしなど、さま〳〵御物語ありき、總じて御裏方は、天賦の御性質の凛々しく快活にましましければにや、

「衣服調度の好みに心をくだくよりも、登山旅行などに辛苦を嘗むる方遙かに興多し、」とは、度々の給ふ所なりき、されば、内地各所は云ふも更なり、樺太までも、清國までも、さては世界各國をも通じて御旅行あらせ給ひしならん、内地の御旅行には、我も扈從し奉りし事もありき、樺太よりかへりませし折は、彼地にて得させ給へる植物の標本、其他、繪はがき、物産、いろ〳〵と示させ給ひて、彼地に渡り居れる女性の、品位あるものゝ尠くて、婦人會など、容易に發展の見込なきをなげき語らせ給へり、

清國よりかへりませし折には、

西大后に御謁見の御模様など、委しく御物語ありて、大后が正面にましまし、皇帝は傍らに在しまして、しかも、大后が對話のをりに、文字を認めたる紙片を持ちて、朗讀的に御言葉を賜はりしに、そが左侍郎以下七人の侍臣を經て、漸く自分に達せしに、いたく驚きたりなど仰せられたりき、歐亞諸國の御漫遊談は、そのうち、折を得てゆる〳〵承らんとおもひしものを、今ははや、再び御聲容に接し奉るべくもあらず、空しく曾て賜りし紙上の溫容に詭拜して、涙に咽ぶのみとはなりぬ、

實に御裏方は、資性聰明にましまし、就中克己心に富み給ふ事は驚き奉るばかりにて、一旦斯くと思ひ立ち給ひし事は、如何なる艱難を排しても、なし遂げ給はざるはなく、卅七八年戰役の頃には、深窓に育ち給ひし蒲柳の質をも厭はせられず、

をみなとてすめら御國の民なればつとめざらめやはげまざらめや、

と國風に添へて垂示を下し給ひ、各地を御巡敎ありて、ひたすら軍國の爲に、御心をくだき給ひしは、皆人の知る所なり、

「宗門の爲なれば、身を粉にしても、互にはたらきたきものなり、」

など、折ふし賜はりし御文のはしに、しるし給ひし事もありたりき、

すべての學藝に對しても、實に一を聞いて十を知るの明を持ち給ひ、和歌にも長け給ひて、御筆跡も美はしく、繪畫も學び得て妙を得給ひ、折々賜はる御内信などに、竹壽と御認めありしは、繪畫の御號なりとかや、

わけても御宗乘の事は、御幼少より、明如上人の御膝下にて、親しく御相承ましましければにや、信心正因の大本は申すまでもなく、よく精微なる、異安心の種類までも心得させ給ひて、科學の發達につれて、心得違ひの者の起りはせずやなど、御憂慮ましませし事すらありき、

されば、全國の婦人敎會の連合を計りて、女人往生の正因、王法爲本の大道をもしらしめんと、まづ模範敎會として、東京の令女敎會の發展に最も心を用ゐ給ひ、

婦人會連合機關雜誌も御内意によりて始めて發刊するに至りぬ而かも、一方に在りては、教育によりて、女子の淑德を發揮せしめんと、女學校の總裁ともならせ給へり、數年前、女子教育の事に就いて賜はりし御文の中にも、

「自分は專門の教育家の資格あるにあらず、また、年もゆかず、世間の事情にも通ぜぬ事故、どこまでも、自分の意見を透すといふにあらねど、まづ、中流以上の目的とし、學校の品位を高くし、品行を第一として、宗教心を持たしめ、倫理の事も、東洋的も、西洋風も、雙方ともに程度のある事なれば、兩者の中よろしきをとり、あしきを捨つる樣にいたし度、くれ〳〵も學校の品位を落さぬ樣にいたしたし、されど、先づ、多數會員の意見を第一とするがよろしからんとおもふ、」

云々と細々御認めありけり、かゝる内信を、世に示さんは誠に恐れ多き事なるやも知れざれど、女子教育に就いても、一定の識見を持ち給ひながら、而も、如何に謙遜なる態度にて、御内意をもらし給ひしかを、人の知る一端にもとてかくはしるし奉りぬ、

おもへば、曾てわが大患にかゝりし折、御裏方より、特に御見舞賜はりし御禮にとて、輕癒の後參殿せしに、

「御身もし死なば、我みづから、法名を書いてとらせんとおもひつるを、惜しくも快癒してけり、」

など、たはむれの給ひける事もありしが、今は却つて、我身の御あとに殘りて、御裏方の御上を偲び奉る事となりたるぞ、かへす〳〵、口惜しくも悲しくも覺えはべる、さては、度々の大患に犯されし我身の、徒らに永へて、春秋、なほ且、富み給へる御裏方の、宗祖の大御遠忌をも待たせ給はで、此土の化緣盡させ給ひし事、實に老少不定の御をしへを、今更ながら深くおもひ知りぬ、

かゝる事、書きつゞけおもひつゞれば限りもなし、こたび、御遺物を拜受するに

及びて、更に追懷の涙とゞむべくもあらず、今はしも、かゝる筆のすさびを、をこなる業と、人のみそなはさんうしろめたさをも忘れて、おもひ出づるふしゝを、謹みてしるし奉りぬ、噫！」（明治四十四年）

雨田老師の事ども

▲幼時の苦學　老師は、山口縣佐波郡升谷村專照寺清水氏の次男（御傳記には四男とありますが、私達は、唯だ長兄の圓諦師の事を伺つたぎり、少しも他の御方の事は伺ひません、多分夭折でもせられたことでしよう）で、老師の御話によりますと、專照寺はあまり大きくない寺、イヤあまり所ではない、極々小さな寺だそうで、次男坊に學問をさせるなどゝいふ餘裕はなく、何でも老師の幼時、隣村の或る寺へ、學問をさせる約束で養子に行かれた、然るにその寺では、自分の小さい娘を可愛がつて、老師を非常に虐待するのみならず、少しも學問をさせず、毎日耕作の事に從事などさせたので、そこで老師は已むを得ず村の神官の所へ行つて、外史や他の書物を借りて來て、夜分に反古紙や塵紙に寫し取りつゝ勉學せられたといふことですから、私達は半紙や白紙を粗末にするのを非常にやかましく訓戒されたものです、老師手寫の外史等は、今も尙ほ保存せられて居る筈です、

▲獨力自活　十七歳位の頃、養家に居ては、到底勉學は出來ないから、強ひて離緣を乞ひ、（この養家は島地家に非ず、島地家へは老師が他日成功してから入寺されたのです）それから近村の私塾や、萩の城下の學校へ入つて勉學されましたが、いつも自活で、まア云はゞ今の苦學生のやうなもので、托鉢をするやら、諸處の寺などへ報恩講や彼岸會の手傳ひに行つて、僅かばかりの謝儀を貰つて、それでやつと學問をして居られたのださうです。

▲命名の事　老師は、幼時謙致と云はれ、其内に默響と名乘つて居られたのださうですが、その默響といふのもやはり、「維摩の一默、響雷の如し、」といふ文句

の中の響の字をとられたのださうですが、然るに同じ塾の中に、默雷と名乘つて居る友人が居つたので、どうもその雷の方が響よりもよほどよいと思はれ、そこてその友人に、雷の字を呉れと云はれたけれど、友人はなか〳〵呉れないから、そんなら己が取つて見せるというて、自分の所持品や何かにみんな默雷と書きちらかし、他の親友をも語らつて、自分を默雷と承認させるやうになさつて、遂に默雷となられたのだそうてす、其時その名を取られた友人といふのは、多分後に森三曉といふ人だと伺つたやうに思ひます、

▲老師の恩人　老師の活動功業に就ては、外には木戸孝允公の援護尠なからず、内には光田爲然氏が預かつて、大いに力があつたので、光田氏といふのは、光明寺三郎氏の令弟で、よほどの秀才てあつて、實に老師洋行の一頃などに就ては、氏の奔走盡力に依るものが多かつたそうてすが、惜しいかな光田氏は、洋行の歸路病歿せられたとのことです、其上侯などもやはり助力せられた方とのとてす、が併し老師にとつて、最大恩人は塾に居られる頃、いつも飲食や衣服を給補して呉れた信者の老婆だそうてす、惜しいことには、私は此の婆さんの名を忘れましたが、此の人が、最大恩人だといふことを常々伺つて居りました、多分今も、其遺族などが生存して居るなら、老師の御遺品でも與へたらと思ひます、其時分この婆さんが居なければ、到底自活は出來得なかつたと申されました、

▲錦を着て故郷に還る　或時私達が、老師の御生涯中、最も得意の時だというて伺つた御話は、何んでも老師が青年時代に、長崎へ說敎に頼まれて行つて、そしていろ〳〵の見聞智識も廣めて、また御法禮も澤山貰つて、そして其頃はまだ〳〵最も珍らしかつたブリッキの御盆、フラスコ德利（今の硝子瓶）などを持つて、馬に乘つて郷里へ還つてゐらつした時ぐらゐ、一生の中で愉快得意の事はないやうに仰せられました、此時先の養母が歸つてくれというて、懇願に來たのでも、如何に御得意であつたかゞ分ります、そして能く、「オレ達は全く獨力苦學で、それで

も二十五歳頃には、最うチャンと一人前國家に盡して居たのだが、御前達は親の脛をかぶつて、それて三十歳になつても役に立たぬ」などゝ、青年を訓戒せられた事も耳にしたことがあります、

▲反對論を立てゝ新智識を得　老師は明治五年に洋行されたのですが、外國語の素養などはなかつたのに、どうして洋行して、世界の大勢を知つて御歸りになつたかといふに、洋行中常に人に對して反對論を唱へて、そして先方の意見を御叩きになつた爲めださうで、ただフム〳〵と感心して居つては、智識は少しも增進しないから、何時でも異說を主張して、頻りに議論を戰はし、そして大要を了得なさつたのださうです、

▲洋行中の失敗　洋行中の失敗として御話になつたことは、初め洋行前に、誰かゞ外國へ行くと、漬物が無くて困るというたので、荷物の中へ澤庵漬を入れて行かれたさうです、然るに愈々あちらへ行つて見ると、チャンと立派な食堂であるから、なか〳〵澤庵などを出して喰べる場合がない、其中に澤庵が腐敗して、妙な臭氣が外へ漏れる、そこてそれを捨てやうと思はれたが、公園も街衢も立派て便所でさへ整頓して居るので、其漬物の捨て場に困つたが、とう〳〵ボーイに頼んてやつと捨てゝ貰つたが、洋行中こんな困つた事はないとの御話でした、もう一つ外に、或時通辯を連れずに紙を買ひに行つて、薄い紙を買はうと思つたが、どんなに手眞似をしても分らなくて、終に用を辨ぜずに、歸宿したことだと申されました、老師が洋行の途中の句に、印度洋て、「凉しさやアイスクリーム、ウルゴール」といふのがあつたといふことてすが、老師は詩歌俳句、何んてもちよつと奇想を弄して、云ひ出づることが御得意のやうでした、

▲明治十五年後の老師　私が上京しました十五年頃は、最早や老師の活動時代は殆ど一段落を告げて、白蓮會の全盛時代であつたので、尤も私の上京します以前は、鳥尾さんや、山田さんや、品川さん、野村さんなどを初め、種々の男子の方

が土曜日毎に島地家で講演談話を聞かれたさうてすが、私が來てからは、白蓮會の參詣者は主に貴夫人連で、其頃はまだ築地の令女敎會などもなかつた頃てすから、白蓮會の報恩講などは、それは〳〵多數の貴夫人連が參詣なさつたもので、私が今日澤山の上流婦人を存じ上げて居りますも、おもに其頃御目にかゝつた因緣に依るものです、今の千代田高等女學校の前身の文藝學舍の創立は、其等夫人連の援助に依るもの多大であつたのです、今までも千代田高等女學校の校長は、故御裏方御名義でありましたが、其頃の因緣から、やはり多數の貴夫人連が、學校の後援となつて居られる譯てす、そこて十五年以前の老師は、白蓮會と文藝學舍と地方傳道とて、格別人目を牽くやうな活動は、唯だ「佛敎各宗綱要」編纂の時に、日蓮宗妙滿寺派の人々と「四個格言」抹殺の爭ひを法廷てされたことだと思ひます、

▲老師の東京に於ける住居　明治三年頃、初めて東京へ出られました時は、築地の御門長屋に居られたのださうて、其頃明治十年頃、本山の執行長を辭して、東京へ出られたる時には、本山から麹町一番町に家屋敷を賜はつたのださうで、其後都合あつて、その屋敷を他人に讓られ、私の上京した十五年頃は、上六番町に寓居して居られ、十七年頃に、中六番町の御法主樣の御別莊地を拜借して、白蓮會堂及自宅をも建築されたのてす、そしてあの中六番町の敷地は、麹町の廿五日講の信徒が、明如上人に献納したもので、今の千代田高等女學校のある處です、卅九年に盛岡へ退隱なさるまては、常々あそこに居られたのは、皆さんも御承知のことと思はれます、

▲老師の嗜好　老師は、衣食住に就て總べて無頓着で、少しも特別の注文や、希望はおありなさらなかつたのです、晩年には、喜んで印材や古錢を集めて居られましたが、書畫骨董などに、多大の資を御拋ちになるやうなこともなかつたやうです、御菓子の中ては、餅菓子を少し召し上るぎり、料理は極く淡白な物がお好

き、御酒も若い時には上つたさうですが、私達が存じましてからは、少しも召し上つたことはありません、唯だ一つ茲に例外なのは、淨瑠璃が御好きであつたことです、

△淨瑠璃が御好き　淨瑠璃は、人情を穿つてゐてよいと仰しやつて、越路太夫などは、たびゝ聽きに御出になつたことがあります、そして家庭に於ても、老師の誕生日の祝ひや、子供の祝ひ事などのある日に、皆の者が、老師にねだつて願ひますと、少し位のさわりなどを御語りになつたこともあります、あの小さい、まん丸な體から、さびのある巧みな節廻しで御語りになつたものです、そして此淨瑠璃は、餘程小さい時からお好きであつたと見えまして、幼時、始て入塾した時の同僚の披露に、何かおごる代りに、淨瑠璃を語つて、友人を驚かしたと御話しになつたことがありました、

△宗祖降誕會の率先者　今日では、各宗を通じて宗祖の降誕會など、別段珍らしいことでもありませんが、まだ〳〵明治二十年頃には、誰も御寺で降誕會の祝ひなどをする者は一人もなかつたのです、それを始めて島地家で催したのです、築地などでも、島地家より數年後に始められたやうに思ひます、それで私達は、毎年の降誕會の福引を、非常に樂みにして居たもので、或る年などは、白蓮會の宗祖降誕會に、其頃築地御滯在中の文姫樣(光瑞法主の令妹今の高田派の裏方です)を御請待に築地へ參りましたら、恰度其日、九條家の姫君達も、築地へ御參詣になつて居りまして、文姫樣と御一緒に、白蓮會へ御臨場を賜はつたのです、今から考へますと、其七ッ八ッの御小さい九條家の姫君樣の中、御一方は今度御かくれになりました本派の御裏方樣で御座います、追懷談を申上ぐるも恐れ多いかも知れませんが、其頃の白蓮會の降誕會の盛んてあつたことは、此事だけでもお分りであらうと思ひます、老師は、御寺は凶事ばかりの集合所でなく、また吉事の會合所としたいといふことは、常々御話しになつたことです、

▲晝寢せられし事なし　老師は、家中で一番早く御目覺めになつて、夜も一番晩く御寢みになり、就寢前には、どんな忙がしい時でも、深更になつても、必ず其日の日記を認めてから御寢みになつたのですが、折々夜汽車などで、朝早く御歸宅になることがあつても、矢張りいつもの通り、終日御用をして居られ、そして「おれ達は若い時から苦勞して、よく身體を鍊へて居るから、一晩や二晩で、決して眠いとは思はない、お前達は意氣地なしだ、」と、始終仰しやつたのです、然るに一昨年あたりから、折々晝寢を遊ばすことがあるので、老夫人などは、餘程老衰なさつた證據だというて、内々心配して居られたのです、昨年御目にかゝつた時、私にも「おれはよほど、自分ながら老衰したやうに思ふ、」と、仰しやつて居られましたこともあります、併しよく今日まで御續きになつたと思ふほど、常に御勤勉であつたのです、

▲子供に同化同情せられし父上　老師は、家人の過失など、叱責せられたことはあまりないやうに思ひます、そして子供連でも、こはい父上と思ふ場合は至つて尠なく、常に家庭に在つては、子供を友として居られたのです、末子の小さい威雄君が、大切の維摩の畫像に墨を塗つたときなども、優しく一口の誡めだけでした、宗祖の降誕會や、正月の歌留多會などに、福引をしたり、賄征伐をしたりする時には、父上は、參謀官でも贊成者でもあつたのです、或時は、子供や青年等と一緒に、手品などをして戯れられたこともあります、何かの會などに、大あばれをしたり、餅を三十切れ喰べたの、お赤飯を十四杯喰べたのといふ豪の者は、常に老師から賞讃されたものです、其他子供のする事は、何でも直ぐに贊成されて、少しも厭やだと仰しやつたことはありませんでした、

▲危篤の病床　私が御危篤の枕頭に伺つた時は、恰度、老夫人が「皆さんがこんなに充分にして下さるのは、みんなあなたの御徳で御座います、」と慰諭なさると、老師は「イヤ〳〵みんな佛樣の御蔭だ、」と言うて、頭を振つておいての所でした

が、少し離れて控へて居ります私を、泌み〴〵御覽になつて、「無理に病中を出て來ないでもよいのに」と仰しやつて、なほ傍らの篤子さん（大等氏の夫人）を顧みて、「瑞枝姉さんにお茶でも汲んでお上げ、」と、仰しやつたので、私は實に其の慈愛の深き御言葉に感泣したのです、そして胸が一ぱいで、遂に何も言ひ出すことは出來ませんでした、

▲老師と私との關係　老師は、山口縣の出身、私は信州の生れで、其間に何等の血族的關係は無いのですが、どうして私が島地家の娘同樣の慈愛を受けたかといふに、私の實父の井上寂英といふ者が、明治六七年頃、神佛分離運動のあつた前後に、矢張り築地の事務所に出勤して居つて、故明如上人にも近侍して居たので、恰度親しく老師が明如上人に神佛分離の急務を極言なさるのを、御側で聞いて居て、或時は老師と父との外に誰も居なかつたこともあるさうです、……今度も父が老師の御見舞に上京して、其當時の事を委しく聞き取りましたが、實に其時の老師の態度といふものは、京都邊では、權者（佛菩薩の再來）であるかと許したほどであつたさうで、……父も深く老師の卓見と膽力とに敬服して、其後是非娘（私の事）を敎養してくれというて、私を國から連れて來たのがもとなので、私は明治十五年に、十二歳で上京して、島地家を保證人として跡見女學校に入學し、爾來三十年間、私の境遇は、種々の變化を來たしましたけれど、常に島地家を中心として居るやうなわけです、尤も私は、一年二年と引續いて、島地家に居た事はないのですが、今でも私の住所を知らない友人知己などは、常に島地家氣付で、信書を送つてよこします、私の初めて上京した時は、雷夢さんがまだ母上の御乳を飲んでゐて、默爾さんも、ピー〳〵泣いて居られた位で、篤子さん以下は、みな其後生れたのです、併しそれも、最早や三十年以前の事、思へば全く夢のやうです、（明治四十四年）

逝ける野の人

▲天才詩人　野の人とは、文科出身の齋藤信策さんのことで、高山樗牛博士の令弟で、而かも、新進文學者として、天才詩人として、世に知られた方なんです、その齋藤さんを、どうして私がよくぞんじて居るかと申せば、島地雷夢君同學の親友であつたからです、雷夢さんと、私との親族關係は、今更申上げるまでも有りますまい、

▲初對面　そして、私が一番最初に齋藤さんを知つたのは、甚だ不合理千萬な場合からでした、今から八年ばかり以前に、私のまだ小田原に居りましたころ、丁度、春期休業で遊びに來て居た雷夢さんを留守番として、四五日上京したのです、やがて歸宅して見ますと、下婢が、あわてゝ門口へ飛び出して、御留守中に、島地の若樣が御友達を連れ込んで來て、御馳走をしろ〳〵と被仰つて、大變困りましたと訴へるのです、下婢の訴は、よい加減にきゝ流して、誰だらうと、內へ上つてみますと、一人の方は、すでに私も知つて居る小山東助さんですが、小山さんは箱根の旅の途すがら雷夢さんに逢ひ、はからず留守中に上り込んだ事を、しきりに言ひわけをしつゝ挨拶をされるのですが、もう一人の知らぬ方は、別段恐縮するでもなく、たゞニヤリと笑つて、一寸頭を下げられた丈です、そして更に一泊して、その翌日立たれたのですが、別段委しい名のりをするでもなく、飄然と歸つて行かれた、それが、後で雷夢さんによく聞くと、其頃、雷夢さんと同學の大學生で、而かも、高山さんの實弟で、齋藤信策さんといふ方だといふ事でした、もとより、高山さんは、私も存じて居るのですが、容貌なら、風姿なら、言語も、動作も、少しも高山さんに似た所のない方で、おまけに、性も異ふのですから、其時は一寸私も氣がつかなかつたのです、併し、それが最初の御緣となつて、其後、齋藤さんは、度々島地家へも、私の內へも來て、雷夢さん同樣に、お

母さん（島地の）、姉さん（私を）というて、歌々をこねたり、理屈を云つたり、夢を語つたり、遊んだり、困らせたりせられたのです、

▲野の人の名　そして、齋藤さんは、初めの内は、號を犀牛とか、落葉とか云つて居られたのですが野の人と爲られる元はといへば、齋藤さんは、何んでも、かんでも、天然が好きで、食物なども、天然の形を其儘の果物や、野菜類、それから、花の上に宿をかりる胡蝶が羨ましいとか、蜻蛉の様に大きな眼玉をむいで下界の人間を見くだしたいとか、雲と睦言をかたりたいとか、風に魂を托したいとか、落葉をカサコソと踏むひゞきは、美妙の音樂の様だとか、たわいもない事を、眞顔で云はれますので、島地家の連中や、私達が、つひ戯言に、齋藤さんは丸て野蠻人の様だ、野に育つた人の様だから、野の人だなどゝ云ひ出して、それが、つひそれなりけりで、今日の野の人となられた譯なんです、

齋藤さんの歌に、

先の世は浪の花藻の身なればか
　沖のみどりの底ぞ戀しき、
魂のみは鷗となりてながらへば
　浪の底にぞ我沈まなむ、
こがれても翅なき身は夢の間も
　北にながるゝ雲ぞ戀しき、

などゝいふのが有りますが、平生の齋藤さんの性格より押しても、これは單に、歌として詠み出てられたのではなく、眞實の、御自分の心からの感じを述べられたものなんでしょう、

▲令兄の七週年忌　去年（四十一年）の十二月、駿河の龍華寺で、高山さんの七週年の御法事が在つた時、

めぐる日を仰がむかぎり無き人の

なげきつきせぬ我が涙かな、

といふ歌を添へて、「樗牛全集」の第五卷を私の所へ持つて來て下さつた、私は今清見潟の龍華寺附近に居るのです、此時私は、齋藤さんと御一所に、令兄の御墓參りをして、其かへるさに、どういふ拍子て在つたか、ふと私が、高山さんの安心立命に就いて少しく申しますと、此の時ばかりは、平生の不肖なる弟君、野の人ではなく、立派に肩書つきの、學者といふ態度となつて、……イヤ、高山は徹頭徹尾、煩悶の人て在つた、愁や、惱や、病を恐がつて、棄てゝ、强ひて、發心解脱を裝ふやうな、僞善者てはなかつた、彼は飽く迄も、人生に執着して、其半面の闇路を辿りては、人生その者の、悲慘を、自ら甘受するをも辭さなかつたのだ、……と盛んに議論を上下せらるゝ果は、「樗牛全集」をもう一遍通讀してから、亡兄の親友姉崎博士の前で御意見を御述べなさいと云はれたのです、私は今ても思ひ出しますが、此時ばかりは、平生の不得要領な齋藤さんではなかつたのです、

不肖なる弟　今こゝに、わざ〳〵不肖なる弟君とことはりがきをつけたのも、可笑しいですが、この不肖なる弟といふ事に就いては、少しく因緣が在るのです、その事の起りは、齋藤さんの御話によると、まあかうなんてす、それは何時だか、「帝國文學」の大會が在つた時に、大町桂月さんが、齋藤さんに酒杯をさしつけて、しきりに飲めと强ひられるけれど、齋藤さんは飲めないと云つて、辭退をなさると、大町さんが、君の令兄は、大に飲めたのに、君は不肖な弟だナァーと云はれた、其言葉が、大層齋藤さんの氣に入り、其後常に、不肖なる弟といふのを、喜んて自稱し、かつ、大町さんを、それから好きになつたと云つて居られましたので、私達もつひ、不肖なる弟さんなどゝ、お呼び申しますと、しきりに得意がつて居られたのです、總じて齋藤さんは、人の皮肉などを、あまり氣にかけなかつた方なんてす、

▲新夫人ピヤノ　齋藤さんは、折々人が、奥さんを御迎へなさいなんて勸めますと、……「イヤ、私はどうせ長生しませんから、後に殘すのが可愛想ですから妻は持ちません」などゝいうて居られました、そうして、其代りに、御父上にねだつて、立派なピヤノを買つて御貰ひになつたのです、或る時、私は一寸齋藤さんの御内へ參りますと、御國から御父さんが御出になつて居て、そうして、昨日買つたばかりだというて、立派なピヤノが据ゑつけてあるのです、そこで私はつひいたづらに、神戸に居る雷夢さんの所へ、……「此度、齋藤家では新夫人を迎へられ、昨日私は御父さんの御紹介でお目にかゝつたが、誠に、妙音天女とみまがふばかり美しい方で在つた……といふ樣な事を、申送つたのです、雷夢さんはこれを本當とおもつたものか、早速齋藤さんへ御祝ひの手紙を上げたとやらいふ事で、此事に就いて、齋藤さんから私の所へ、左の如き通信が參つたのです、

「……雷夢君から手紙が來た、妙音天女の化身を迎へた相だが、媒酌は誰？、御家風しつけの御指南役は誰？、なぜ披露の當日を知らせなかつたかと、眞面目の樣な、洒落の樣な質問が有つた、……隨分あなたも意地の惡い洒落をいうておやりなすつたものぬ、併し、雷夢君には、私はかう辯解してやりましたの、――成る程、妙音天女かも知れない、けれど、予の天女は、なか〳〵天才だから、予の如き非天才は、少々嫌はれ氣味、ダカラ、仲がどうも圓滿でない、妙音所か、實は沈默天女と云ひたいのだ、彼れも沈默、予も沈默、お互に背中合せの冷たさである、依つて、もう二三年の間は、披露などおもひもよらぬ、其内に、予も天才じみて來て、お互に、圓滿の仲となり、琴瑟和合する樣になつたら、始めて皆樣にお披露申すと云つてやりましたの、私もなか〳〵甘いでしよう……」

此事は、東京でもいくらか評判になつた相てすが、はかないいたづらも誠にその

心中を御察し申すと、いとをしくいぢらしい次第なんです、

▲死の覺悟　そんな位ですから、齋藤さんは死ぬ事に就いては、乘ねてもう立派な覺悟を以つて居られ、曾て私へ下さつた御手紙の中にも、こんな事が在りました、

「……實に世の人は、死を怖いものとおもつて、如何に、花々しく死ぬべきかを思ふ人が尠くない、なんで、こんな人間に、美しい生存、美はしい生命を願ふ事が出來やうか、……とにかく、世に在る間は、先づ死の上にあらゆる觀念を立てなければならぬ、天を樂み、人を愛し、生をなつかしみ、世を渡つて行くのも、つまり、死の問題から出て來るではないか、……」

こんな考へて居られたから死を覺悟しつゝ、尙且、大學てはプラトーンの研究を怠らず、內ては近世文明史の材料をたゆまず集めて居られたのでしよう、

「……要するに、人世の目的は、如何に美しく生るゝにはあらて、如何に美しく死するに在る、」

などゝいうても居られましたから、まあ、御自分の理想通り美しく、うるはしく實に、夢幻の境に、おかくれになつた譯でしよう、

▲詩的生活　併し、齋藤さんは、死に就いて確かな覺悟が在つたにも關はらず、生に就いては、何等の確實なる責任を感じては居られなかつたらしいのです、これは、一方には、病勢が御よろしくなかつた爲でもありましようが、日常、如何にして、衣食の資を得べきかといふ樣な現實の問題には、至つて無關心て居られたのです、聖書の中に在る、「爾曹空の鳥を見よ、稼く事なく、穡る事を知らず、……然るに爾曹の父は、之を養ひ給へり、……然れば、何を食ひ、何を飲み、何を衣んと、思ひ煩ふ勿れ、……」といへる言葉は、齋藤さんには最も會心の文句て在つたのです、終生花をなつかしみ、雲を戀ひ、親父さんの御小言や御迷惑は、少しも顧みず、平氣で、世の中に生きるよりは、詩の中に生まるといふ態

度で居られたのでしよう、てすから、

「……予は常におもふ、身を忘れ、生を忘れ、否、一切の歸趣を忘れて、しかも野の鳥の如く歌ひ、野の花の如く開落する人は、恐らくは最も幸福てあるまいか、」

なんて書いて居られたのてす、何しろ、右のやうに、詩の中に生きて居る齋藤さんの事ですから、それはもう、天然に對する感興も人並ではなく、一寸散歩など、に出かけても、

「一寸まあ螢を御覽なさい、はかない光を放つて、互に、おもひをかよはせて居るではありませんか、……風になびく草木なぞは、そよぐ葉ずれに、互に語り合うて居るてはありませぬか、」

といふ樣な調子で、古くは希臘の哲學者、近くは獨逸の碩學などの學說をも、度々說明して聞かせられたものてす、そんな事をおもひつゝ、齋藤さんの、

めぐりくる望みの光春の日を
　ほゝゑみて咲くるりはこべかな、
光薄き身を何泣かむ夏の夜を
　月見小草の花ほゝゑむよ、
光なき春夕暮をちる花の
　魂のせてゆく雲あゝ淡き、

などゝいふ歌を吟誦すると、自分達までも、多大の詩趣を感ずる樣な心地せられるのてす、

▲婦人の御友達　齋藤さんは、決して令兄高山さんの樣に才人肌の、風采の上つた方ではなかつたのてす、どちらかといへば、むしろ、無愛嬌な、ムッツリとした、不得要領な方でしたが、しかし詩人的の、やさしい感情を持つて居られた爲めてありましようか？、婦人の御友達が、なか〳〵尠くなかつたのてす、私達の

様な、むしろ、中性の老夫人達は別として、御若い御婦人方に、なか〳〵澤山交際して居らしたのです、ですから、齋藤さんの御逝去の折にも、男性の方よりも却つて、婦人の弔問者が多かつたといつて、御近親の方が、驚いて居られた位です、けれど、齋藤さんは、婦人と交際するといへばとて、どこ〳〵までも、詩人的であつて、決して、其人自身に、直接に、現代的の深い愛着などを持つて交際せられるのではなく、歌人なら、歌を透して、音樂家なら、音樂を透して、書家なら又その繪を透して、否、もし其御嬢さんが御嫁入りをすれば、その新郎君を透して、唯どこまでも、其人に牽きつけられるといふ丈であつたのです、ですから、齋藤さんに取つては、小説や、物語の中の人物に對する感情も、現に生きて居る人々に對するのも、格別、異つた感興ではなかつたらしいのです、鏡花さんの、小説の中に在る樣な、夢みる樣な、神祕的な人物は、大好きで在つたのです、否、それ所ではなく、人間と交際するのも、花をながめ、蝶に憧がれるのも、齋藤さんに取つては、大した差はなかつたのでしよう、この七八年來齋藤さんがなつかしがられた若い婦人の中には、齋藤さんの新體詩のヒロインたりし、さあちやんをはじめ、甲、乙、丙、丁、さま〳〵の人々が在るのです、それで、その一々の人々に對する感興を、又、外の友達に、平氣で語り合つて喜ぶといふ風でした、或る時には、こんな事を書いて居られるのです、

「Sさんには、丁さん以上だとは、けしからむ御云ひ分ね、なにもSさんとは、親しくお話した事もない、唯一寸御挨拶をしたばかり、唯、私は、あの人の書かれた書が、大變好きで、その書に、ほれ〳〵したといふばかり、丁さんは、依然として丁さんですよ、先日の音樂演奏會で、丁さんに御目にかゝりましたよ、紺青色に、波に千鳥の裾模樣のある紋附きで、唐草の織物の丸帶、まことに、さびしみが在つて、趣が在つて、彼の君には相應しい出で立ちでした、見る目も心地がよかつたのでした、その演奏を聞いて居る間に、自分の背中へも、自

づと翅が生えて來た樣な心地になりました！、」

こんな事を云はれるかとおもふと、又一方には、

「私の園に、毎日々々蝶々が來てよ、とまつては歸り、かへつては來る、花を漁つてありく其姿！、つまり、翔けて、憧れて、息ふもせずにさまよふのは、蝶々の性なんでしよう、そのまた牽きつける樣に光ある蝶々の目は、全身の美しさの中心で、夢みる樣な、憧れる樣な、丸でSさんの畫かれた、美人の目そのまゝよ、……併し蝶々は蝶々よ、今に冬枯の我國を棄てゝ、どこかの、美しい花の香を慕うて、飛んで行くのであらう、……」

などゝも云うて居られるのです、

「かの日、御別莊を訪ねますと、新夫人がたつたひとり、東京からは、まだどなたも御出てにならぬと云ふ、私は少なからず狼狽へましたが、併し、夫人の頰の色も、微笑も、やはりむかしのまゝであつたので、私は本當に嬉しくも、なつかしくも思ひました、げにも、其目はいよ〳〵濁りなく、そのほゝゑみはます〳〵清らかで、爽かであるてはありませんか、私こそは、遙かに病人だつたので、むしろガッカリした位、色々の御土産をあげて、その夜はもろともに、久しぶりに、昔の親しき友の仲となつて、十一時頃までも物語致しました、……翌日のあさ、晴れたので、夫人と一所に、散歩をしました、海邊はるかに、富士も見た、箱根も見た、紫の雲、殊に美しかつたので、非常に嬉しかつた、夫人はもう、昔の友であるが上に、妻である、母である、お子さんも可愛かつた！、」

友人の留守宅へ行つて、泊り込んで、平氣でこんな事を云うて居るのは、とても詩人の齋藤さんでなければ出來ない事だと、皆が感心して居ります、

そうかとおもふと、或る時はまた、こんな事も云うてよこされたのです、

「近頃の歌、御目にかけませうか、先よりも、ズット甘い樣ぢやありませんか、

これもかの歌の君のたまものです、……呵々……、

君に逢へば光こがるゝ日向葵の
　ほゝゑみて咲く我心かな、

別れては世の波風のあらければ
　渡るもつらき夢のうきはし、

我涙あだには泣かじそゝぎなば
　しをるゝ花もよみがへるらむ、

君を戀ひてよる泣く涙球とならば
　祕むるにはよき朱の小箱かな、

さらば君おなじ愁へを身にしめて
　薄き運命の世をかこたばや、

いづれも彼の君へのかへしです、あとからも、追々御目にかけませうから、御

病床の中でもよいから、時々、御喝采を願ひます!!」

まあ、こんな調子で、甲、乙、丙、丁、誰に對しても、其時其場合の、特殊な興味を感じて居られたものらしいです、併し、あんまり若い婦人と交際せられて、妙な評判でも立つと先方へ御氣の毒だからと、私も一寸注意したのですが、外にも御氣付きの方が在つたものと見えて、

「例のあの事、先輩からも、親族からも、私は散々に、御めだま的の忠告を受けましたよ、……私といへども、ローマンチックな事を云ひますが、實世間の事、例へば、結婚問題や、人格問題になると、なか〳〵理性的で、道義的判斷力は、決して消耗しませんから、どうぞ、皆樣も御安心下さいましな、決して、世にありふれた、不道義な事は誓つて致しませんから!!」

こんな事を、わざと云はれた事もありますが、實際、齋藤さんは、詩の人、夢の人で在るのですから、事實に於て、如何なる事もおありなさらなかつた事丈は、

齋藤さんをよく知る人は、皆ぞんじて居るので御座います、

▲ルケルヤ　つゐ先々月（六月）だつたか、齋藤さんから、新小説を一冊（十四年第六卷）送つて下さつたが、明けて見ますと、御自分の譯された、ツルゲネフ作の、ルケルヤといふのが載つて居るのです、その小説の大要は、つまり、「悲慘な長い疾の蓐の中に、何等の、不平も、不滿もなく、日を送つて居るといふ、少女ルケルヤの、身の上を書いたものです、其後、暫くして齋藤さんから來ました御たよりに、

「……私「涅槃經」を讀みたいが、島地大等さんが御持ちかしら、是非讀みたいのですから、もし、書店に在るなら、何所だか教へて頂戴な、此頃は何となし身體中不快を極めて居るので、大閉口、……ルケルヤは、えらいではないか、私などは、自から愧ぢましたよ、

破れ果てし船にすがりて生死の
海を幾度尙迷へとや、
翔るべき方も知らねば我魂は
病めるむくろに尙巣くひつゝ、
我魂に似し幻の夕雲よ
いづこ流れて何消えもせぬ、

とあつたのを見た時には、嗚呼、齋藤さんも、もうこんなあはれな事を云はれる程、お悪いのかと、いたく同情の念に堪へなかつたのです、

▲宗教に對する信仰　齋藤さんは、從來、宗教に對しては何宗何派に對しても、特別な信仰や、趣味は持つて居られなかつた樣ですが、美術を透して、常に、何れの宗教をも嘆美して居られたのです、それが、去年の夏、旅行からかへつてから、……「僕は京都や奈良へ行つて、始めて佛樣が有り難くなつて來た」と云はれますから、又、例の美術を透してだらうとおもつて聞いて居りますと、そうて

はなく、……「佛様も、唯美術品として見る丈なら、博物館へ行つて見れば澤山だが、どうも博物館では、佛様の下宿屋みたやうで、有り難くない、それが、古色蒼然たる大伽藍へ行つて、跪座して拜むと、何とも云へぬ崇嚴な感じが胸に充ちて來る、つまりあれは、その道のたくみが、眞實の信仰心から作り上げた、その眞心が、此方に感染するのだらう、それをおもふと、伊太利を旅行して、名高い巨刹の有名な美術品に接しながら、あちらでは、宗教の殘骸ばかりを見て來たなんて、大膽に云ひ放つた、名高い或る牧師さんの氣が知れない、美に對して敬虔なる觀念がない人に、どうして宗教の眞生命が解らうか、……」なんて云うて居られましたが、それか、あらぬか、齋藤さんは、近來御經を讀みたいなど丶云ひ出され、又、死後は、島地大等君に讀經をしてもらひたいと遺言せられたそうですが、龍華寺に葬つて欲しいと云はれたのは、兄さんの傍でもあり、日頃清見潟の風光が御好きで在つたからでもありましようが、念佛の僧侶に讀經を頼み、法華の寺に葬つて欲しいなど丶云はれたのは、實に天眞爛漫なる詩人の齋藤さんらしい所で、それ故、戒名を、いづれの、宗旨に依るでもなく、唯、信策居士としてありました、「さすがに、齋藤さんらしくてよい、」と私が申しましたら、信策さんの大兄さんも、「却つて、其儘がよろしからうとおもひます、」なんて云うて居られました、

「……私などは、三界の孤人たると共に、萬物に向つて、同等平等の、價値と、意義とを感じ申候、かくなりて後の世界は、眞に新たなる價値を生じ來り申候、この心緒を辿らばやがて解脱の域に入られんかと存じ居り候……、」

これも、齋藤さんの通信中の一節です、

▲最後の通信　齋藤さんがもう永くはあるまいとは、つひ先達、姉崎博士にお目にかゝつた時にもお話が在つたのですが、じかし、此の間までも度々御自筆の御便りが在つたのですから、まさか、きのふ、けふ、その訃音に接し樣とは思はな

かつたです、有爲の文才を持ちながら、あたら空しくなられたのは、誠に痛歎の至りですが、私へ來た最後の通信には次の樣な事を書いて在りました、

「去年、御地から、戴いて參つた白百合の花、それは〳〵美事に咲きました、床を南に向きかへて、花に對して、默想して讀書して居ます、私は床がまだ巣ですよ、丸で前途に望みもない、翅もなへた、子燕が棄てられた樣！、……あなた樣は、如何、東京は今極暑なり、」

これは去年(四十一年)の夏、齋藤さんが關西の旅行からの歸路に、龍華寺の兄さんの御墓參りをせん爲に、私の內へ御寄りになつた時に、隣の爺やが、山から取つて來てくれた白百合の花を、墓前にたむけて、そして、根丈東京に持つて御かへりになつた、その根から、今年咲き出てた花の事なんです、去年それを御持ちかへりになる時に、「私は花の苗を植ゑる度毎に、その花が咲き出る迄、生きて居るやら、どうやら分からぬとあやぶみつゝ、いつも植ゑる」なんて云ひながら、持つて御かへりになつたのですが、そんなはかない言の葉も、今はおもひ出の種ですが、しかし、せめてその咲いた百合の花を見てから、お逝れになつた丈、殘つた私達には、幾分の慰安を覺えるのです、

▲御葬式　齋藤さんが大久保の里でお逝去になつたのは八月六日、そして龍華寺で、御葬式のあつたのは八月の十五日です、齋藤さんの御母堂や、大兄上をはじめ、外にも御親族が御出になつたのですが、姉崎博士が、おもに主となつて式を御司りになつたのです、樋口文學士が「帝國文學」を代表して弔詞を御讀みになり、佐々木信綱大人からは、

駿河の海ゆたけき見つゝとこしへに
何おもひます兄君のもとに、

といふ弔歌を送りこされました、參列の人々が、御燒香をする、長い〳〵問、御坊さん達が御題目を唱へて居る其間に、私は、何ともいへぬ哀痛を感じたのです

が、少し後れて東京から御出になつた、御親友の小山東助さんは、尙更、墓前で無限の感慨に打たれて……、

南風の暖き里とこしへに
夢の華咲け君が御胸に、

といふ歌をその靈前に捧げられました、雷夢さんは神戸からはるかに、

哀悼の涙にむせぶ

といふ電報をよこしましたが、かくて私達は、天才野の人の心靈の無限力を信じ、清見潟の海光に對して、永へに、その幽魂を追慕してやまないのです、

神さびし神代なりせば千鳥とも
我はならまし三保の松原、

これは齋藤さんの歌ですが、今尙、墨痕鮮かに、私の内の短冊かけに、その匂ひを殘して居るのです、噫！（明治四十二年八月十七日清見潟にて）

明治四十五年六月四日印刷
明治四十五年六月七日發行

定價金八拾錢

著作者　藤井瑞枝
發行者　高島大圓　東京市小石川區原町六番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地　振替東京一五六八六　電話番町二六〇八
丙午出版社

文學博士 井上圓了先生新著 △空前の大旅行記出つ

南半球五萬哩

四六判美裝 定價九十錢 郵税八錢

本書は井上博士が南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峽まで到る處の山容水態國情民俗の苟も眼窓に映し耳朶に觸れたる珍奇怪異の現象はこれを詳記して漏らさず殊に各地の景色風俗等の寫眞版數十個を挿入したれば讀者は座ながらにしてしかも五万哩大旅行の途に上りつゝあるの思をなさむ冀くばこれを以て夫の當世流行の假作的冒險譚空想的旅行記と同一視すること勿れ

賣文社長 堺利彦先生新著

賣文集

四六判箱入 定價金壹圓 郵税八錢

卷頭之飾

著者の友人先輩 三宅雪嶺、福田德三、花井卓藏、伊藤痴遊、德富蘆花、島村抱月、杉村楚人冠、田岡嶺雲、木下尚江、加藤咄堂、伊井容峯、安部磯雄、等六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語

序

賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 一、唯物的歴史觀 二、子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を評す 第二編 一、暮春の古服 二、予の夢 三、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇「谷川の水」(バーナード、ショウ原作) 第四編 一、告白、荒畑寒村 二、クレンクビュ、大杉榮 三、謀叛人耶蘇、高畠素之

新公論社編 ○附錄學生鎖夏法

男女學生氣質

定價金二十錢 郵税金二錢

此書は坪内雄藏、柵橋夠子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、石黒忠悳、遲塚麗水、中川藤次郎、南岩倉具威、棚橋一郎、寺田勇吉、フォスター、坂本盛德、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、嶺野黄洋、中島德藏、下田次郎等の大家が現代男女學生の長短兩方面を觀察しその長所を助けその短所を補ふべき方法を示されたるものなり

文學博士 村上專精先生著

自信錄

改訂增補 定價金六十錢 郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ題を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく逃べて盡さゞるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著

誠のしるべ

定價金四拾錢 郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著

女性訓

定價金四十錢 郵税金六錢

本書の内容は天職中庸質素謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重れたる村上博士はよく女性の缺點を摜み來りて之を訓誡するその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

文學博士 村上專精先生編

原人論

定價金十二錢 郵税金二錢

科註

大乘起信論

定價金十六錢 郵税金二錢

科註

右の二書は共に雜記帳入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

アー、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ピッシエル先生增訂
ドクトル、フィロソフィー荻原雲來先生譯補

梵語入門

定價金壹圓
郵稅金八錢

歐亞言語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし宗教の千態萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし東亞文明の根據を探らんとする人も梵語を學ぶべし我邦一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は或な歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初步たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

マクス、ミュラー博士原著
佛教大學講師　文學士　清水友次郎先生譯

宗教學綱要

定價金壹十五錢
稅郵金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミュラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす豈し邦文の宗教學書としは唯一無二の良書なり。

文學博士　高楠順次郎先生閲
曹洞宗大學講師　立花俊道先生著

巴利語文典

定價金壹圓
郵稅金八錢

獨逸哲學博士ポール、ケーラス先生著
學習院教授　鈴木大拙先生譯

阿彌陀佛

定價金廿五錢
郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評喧々たるとや弊社麗に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

文學博士　高楠順次郎先生譯

悉曇阿彌陀經

定價金壹圓
郵稅金八錢

東洋大學講師　境野黃洋先生著

聖德太子傳

定價金弐十五錢
郵稅金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

フエロネル先生原著
第三高等學校教授　文學士　平田元吉先生譯

死後の生活

定價金五拾錢
郵稅金八錢

フエロネルは哲學史上特筆大書せらるゝ十九世紀の鴻儒にして實に今日の經驗的心理學經驗的美學の基礎を置きし者たり。「死後の生活」は此經驗的傾向の大哲學者が、現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合なり氏の說を以てせば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豐富なる暗示則敎を與ふるや疑ふ可からず廣く江湖の愛讀を望む

東洋大學講師　釋清潭先生著

和漢高僧名詩新釋

定價金五拾錢
郵稅金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉たり、和は虎關以後絕海戇堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり、其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるものの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩藻を釋戇して此の如きもの恐くは驚前なるべし

京都帝國大學
文科大學長　文學博士　松本文三郎先生著

彌勒淨土論

定價金壹圓
郵稅金八錢

宗教學上殊に佛教史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地步を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋沒によりて全然暗黑に歸すこれ豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の著『極樂淨土論』と相待つて玆に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恋に佛教の淨土思想を談ぜんとするものぞ

文學博士姉崎正治先生閲並推讃
宗教大學講師　文學士　矢吹慶輝先生著

阿彌陀佛の研究

定價一圓三錢
郵稅金十二錢

上下二千歲の史實と高僧悟徹の事蹟とを有し現に宗教的活力を緊いて佛教の他力方面を代表するものは實に阿彌陀佛の信仰なり阿彌陀佛とは何ぞやその信仰本來の面目を明にしたるものは本書なり世の他力往生の信者は勿論夫の原始佛教の自力主義が何如にして他力佛教を生ぜしか悲悲本願の救主他力回向の信仰は佛教史上如何なる旨趣を有するかを知らむと欲する者も亦此書を讀まざるべからず

文學博士　三宅雄二郎先生著

小泡十種

定價金四十五錢　郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きざる大河となり散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著

達磨と陽明

定價金七十五錢　郵稅金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を闡開して餘蘊なく進德の工夫修養の方法爲學の用心精神錬磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり。

文學博士　井上四了先生著

西航日錄

定價金三十錢　郵稅金四錢

是れ井上博士の洋行土產也歐米に於ける教育宗教文學政治經濟等の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動す征露の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民は又世界の大勢に通ぜざるべからず謂ふ一本を購へ

東北大學總長　澤柳政太郎先生著

退耕錄

正價金壹圓　郵稅金八錢

著者の序文に曰く「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなるとを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焰あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして隱健なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に愛國警世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

スタンフォルド大學總長ジョルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ中村平先生譯

人物の修養

定價金五十錢　郵稅金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジョルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を待たず……我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

高島米峰著

一休和尙傳

定價金四十錢　郵稅金八錢

文學博士　遠藤隆吉先生著

孔子傳

定價一圓四錢　郵稅金十二錢

現代漢學界の巨擘遠藤博士が深遠なる識を傾け椽大なる筆を揮つてこゝに東亞の大聖孔夫子を傳すと言はば敢て又別に時流の廣告的文字を列ぬるの要なかるべけむも試に少しく言はむかその涉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその觀察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未曾の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ蓋し本書一たび出てゝこゝに東洋人の孔子に對する二千年の迷妄謬見を打破し肉あり血ある大聖孔夫子の眞面目は紙上に躍如たらむ願くは世の東洋學術の精髓を味はむと欲する人靈界の偉人に接して修養の資を得むと欲する人悉く來つてこの空前にして而して唯一なる『孔子傳』を讀め

加藤咄堂先生著

宗教的修養

定價金十二錢　郵稅金二錢

ウヰリヤム、バイド氏原著
澤柳政太郎氏序　鈴木券太郎先生譯補

修養處世　自己測量

定價金五拾錢　郵稅金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡德邪癖の鞭朴人格完成の砥礪立身處生の指導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓なるを以てなり來れ青年卿等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕庫を開くべき鍵はこゝにあり

改訂增補　ベークマン先生原著
杉村縱橫先生譯補

強肺術

定價金四十錢　郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め此書に六の特色あり

第一、時間を要せざること　第二、費用を要せざること　第三、場所を要せざること　第四、勞力を要せざること　第五、官文一致なること　第六、總ふり假名付なること

故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に實行し而して確實に其功を收め得べし

黒岩周六先生講演

◉人生問題

定價金三十五錢 郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を說き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て玆に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することを得ん

東京帝國大學講師 文學士 常盤大定先生著

◉釋迦牟尼傳

定價金七十錢 郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖も是等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳說の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り著者常盤大定先生夙に篤學能文を以て聞え殊に佛傳の研究に從ふものこゝに年あり此著の假値壹し推知し得むか

慶應義塾大學講師 曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生評釋

◉和漢名士參禪集

定價金五十錢 郵稅金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷蘇東坡白樂天張無盡寒休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且つ和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ

前外務大臣 伯爵 林董閣下纂譯

◉修養の模範

定價金七拾錢 郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譚の乏しいのに困り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る著者これを愛へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を飜譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することゝなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 村上專精先生新著

◉通俗修養論

定價金壹圓 郵稅金八錢

修養に關する著書古今東西を通じて汗牛充棟も啻ならずと雖もその理論を說けるものは高遠に過ぎその方法を敎ふるものは煩瑣に失し共に採つて以て吾人が日常の行動云爲に資するを難しとす今吾が村上博士こゝに見るありて古聖實踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を說明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐錄して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

堺 枯川先生著

◉樂天囚人

定價金六拾錢 郵稅金八錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるゝ社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを共獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者…獄中生活の大膽なる告白…毫も危險の恐なき快著也

加藤弘之先生序 筑野黄洋君跋 渡邊海旭君跋 高島米峯著

◉惡戰

定價金八拾錢 郵稅金八錢

加藤弘之先生曰はく「著者は新佛教社にありて該雜誌に隨分奇拔なる論を吐き囊きに『廣長舌』を著して忌憚なく社會を罵倒し今又『惡戰』を著はして倍々世を愚弄すされど世を愛へ國を愛する至情は自ら其中に溢流して居る蓋し青年立志の指針たるに足らん」と著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

文學博士 井上圓了先生著

◉南半球五萬哩

定價金九拾錢 郵稅金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峽まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十錦上更に花を添ふ

堺利彦先生譯

◎ルソー自傳 赤裸の人

定價金九拾錢 郵稅金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる波瀾重疊神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

加藤咄堂先生著

◎筆と舌

定價金七十錢 郵稅金八錢

筆舌生活二十年の經驗を基として演說と文章との秘訣を語り模範を示したるもの

明楊起元評註 加藤咄堂先生和譯

◎和譯 維摩經評註

定價金七拾錢 郵稅金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論誦習本として亦最適當なり

「無我愛」首唱者 伊藤證信先生著

◎新氣運

定價金八拾錢 郵稅金八錢

古い宗教や道德はもはや現代の人々の光明とはならぬさればといつてまだ新らしい主義思想の一世を指導するに足るものは起らぬ此時に當りて斷然傳習と敎權との束縛から脫却し世の罵詈嘲笑輕侮憎惡の中に立ち應面なく忌憚なく赤裸々たる自己の所見を吐露して常に努力奮鬪つしゝあるのが本書の著者である本書は主張告白、評論、人物、問答の五篇から成立つて居る全篇の趣旨は要するに政治法律の基礎と宗教道德教育の根抵と產業經濟の原動力と學問知識の源泉と健康衛生の捷徑と娛樂技藝の根本と天地自然の道理とが悉く直截簡明なる無我愛の根本眞理の上に橫はるとを說述し以て混沌たる現代の思想界に一道の新氣運を誘導せんと試みたるものである

巷村隱士 久津見蕨村先生新著

◎眞人僞人

定價金壹圓 郵稅金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か痞癪を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ僞人はこゝにその面皮を剝かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの慨あり

ツーナー、アアイト氏原著
東洋大學講師 中島穗積先生述

◎解說批評 倫理學原論

定價金五十錢 郵稅金八錢

ツーナー、アアイト氏の『倫理學原論』は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓拔の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を捉へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島學士の飜譯によりて已に紹介せられつゝあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解するに能はざるを遺憾とし是が解說を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の題を追うて殆ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力め且つ讀過筆錄の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり

述者敬白

文學博士 松本文三郎先生著

◎宗教と哲學

定價金四十五錢 郵稅金八錢

本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教と道德研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求めむなり

東洋大學講師 釋清澤先生著

◎寒山詩新釋

定價金五十錢 郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

文學士 渡邊又次郎先生著

◎最新論理學

定價金一圓廿錢 郵稅金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又餘外に重要なる題目を揭げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

北條蓮慧師著

◎眞宗教義

定價金二圓 郵稅十二錢

釋宗演師

原人論講話

定價金六十錢 郵稅金八錢

佛教典籍多しと雖も大小二乘の教旨を綱羅し其要を摘み粹を拔きて優劣を判じ深淺を論じ人生の根本たる生死の問題を解決し之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶽然一頭地を拔く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし、本書は著者が獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ龍頭には添ふるに古人の解說を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書により人論に關する古來幾多の註釋書を悉く備ふるにも勝れて知ることを得べきのみならず本書一卷を讀すれば原るものあるなり

幸德秋水

基督抹殺論

定價金七十錢 郵稅金八錢

幸德秋水が最後の文章◎破天荒の奇著

一代の論客として知られたる幸德秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企てゝ今や遂に斷頭臺上の露と消えぬ其鐵窓裡に呻吟せる間特に此一卷を著す所論去りぬ其絕筆文悲絕憤絕殊に其史的人物としての其督の痛絕快行文悲絕憤絕殊に其史的人物としての其督の存在を非認し十字架が牛殖器の表徵形たるを跡ぜるところ骨を刺し肉を刳りて世界の大聖基督をしてるとんど完膚なからしむ洵にこれ教史上の大發見なり殆んど呼幸德秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の讀者を警ふ

島田三郎先生序　高島米峰著

理想的商業

定價金廿五錢 郵稅金四錢

商業とは畢竟物を買ひたいといふ人に賣つて遣はすといふほどの事なり買ひたいとも何とも言はざるものに賣らむとするが如きは是れ豈無理の甚しきものならずや今の商人平氣でこの無理を行ふこゝに於てか百弊起る夫のお客樣といふものゝ無暗にのさばり返るも是がためにして商人の矢鱈に侮蔑せらるゝも亦實に是がためなり

賣るに法あり買ふに道ありこの法を說きこの道を敎へ以てお客樣といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勸め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは卽ちこの書なり但し讀みたいといふ人に讀んで貰はふがために審いたものにしてもとより讀まうと思はないものにまで强ひて讀ませやうといふやうなそんな不所存は毛頭これなきものなり

高島米峰著

東洋史

定價金十三錢 郵稅金二錢

◎學生參考

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を資くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

文學博士　三宅雄二郎先生著

偉人の跡

定價金壹圓 郵稅金八錢

◎增訂

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として玆に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

京都帝國大學文科大學長文學博士
京都帝國大學文科大學副手文學士　松本文三郎先生閲並序
羽溪了諦先生著

釋尊の研究

定價金壹圓 郵稅金八錢

本書は釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし殊に松本博士は嚴密に校閲の勞を執りて研究上の責任を分つ本書の權威以て知るべきにあらずや

帝國大學教授　文學博士　高楠順次郎先生著

國民と宗教

定價金七十錢 郵稅金八錢

◎本書は國民と宗教との關係を述べたゝ論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳說せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし◎附錄として研究上修養上極めて重要の論文十編を收むこれまた實に學界及教界の珍たり

前外務大臣　伯爵林董閣下序
東北大學總長　澤柳政太郎先生序
櫻所　干河岸貫一先生著

修養史譚

定價金壹圓 郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

澤柳東北大學長曰はく「道德上の實行を期するには先づ之を實行せむとの意志を起さしめることが必要である それには人の感興を惹くべき實例を示すのが最もよい しかしその實例を示さうとなると適當なる者が極めて少ない本書の著者は博覽强記能く適當なる者を蒐め來りて其の數頗る多く修身教授上の材料として有益なる者あるを覺ゆ」と

382
290

文學博士　法學博士　男爵　加藤弘之先生著

迷想的宇宙觀

定價金七十錢　郵稅金八錢

高等師範學校講師

王陽明

亘理章三郎先生著

定價一圓五十錢　郵稅金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く人生問題に煩惱して幾多の煩悶を重ねたりしなり或は劍に杖つて滔々の武勳を建てむとし或は筆を揮つて噴々の文名を馳せむとし或は青雲に攀ぢて功名富貴に飽かむとし或は聖賢を學んで天下第一の人たらむとし而して事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學說とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり恐らくはこれ王陽明に關する凡百の著書中最も精新にして且つ最も精細を極めたる者たらむ

積惠堂先生著

淨土教發達史論

定價金六十錢　郵稅金六錢

第三高等學校教授　文學士　野々村直太郎先生著

宗教と倫理

定價金五十錢　郵稅金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饗湯に惱める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附錄には二宮尊德翁宗教論を評す

三宅雪嶺先生序　加藤咄堂　杉村楚人冠二先生跋
結城素明藤伯髮嶺亞爾　高島米峰著

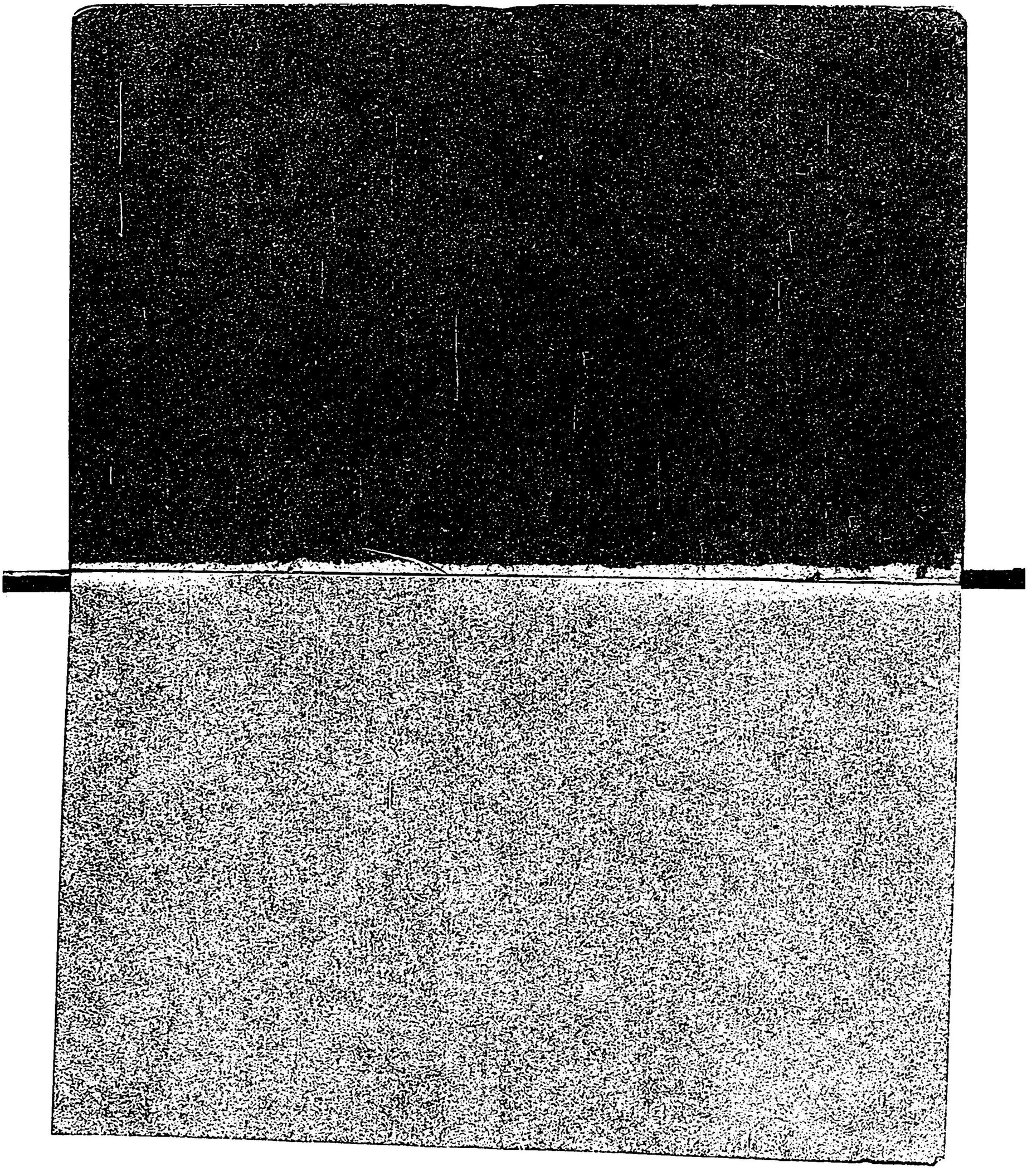
廣長舌

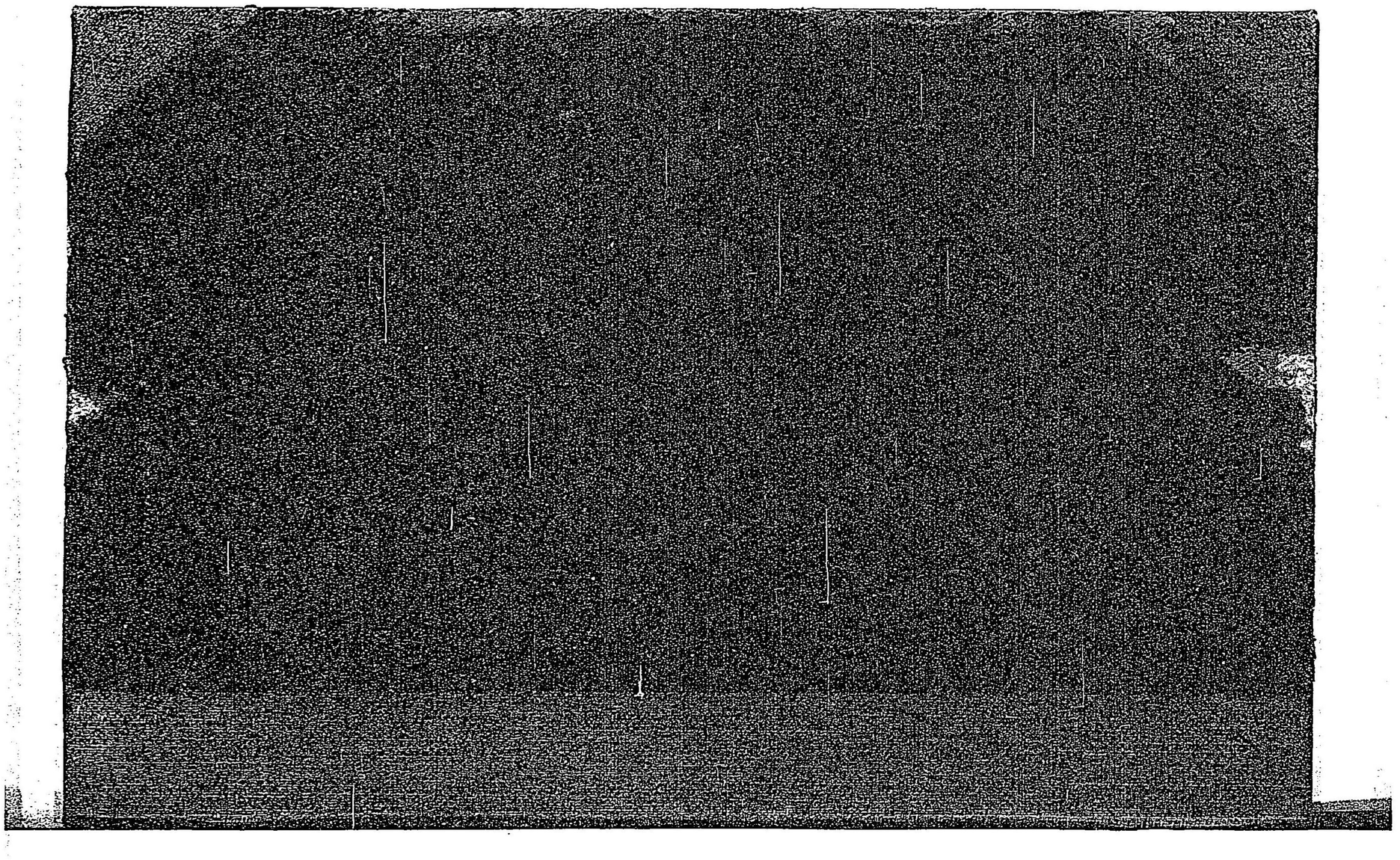
定價金七十錢　郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峰今胸中鬱勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を剜る洵にこれ堂々警世の大文字」と

杉村楚人冠先生曰はく「米峰の文を閱するや一氣呵成にして而かも理路井然たり才華絢爛たり細穿たらざるなく微打たずんば已まず米峰の筆を執るや政治に涉り文藝に及び宗教に關し教育に係り趣味の廣汎に至つては誠や行くとして可ならざるを見ず」と

著者曰はく「褒められて嬉しがる者の初心ならざれどもたゞ當世慣用の廣告字段はかくもあるべし」と





332
290

102440-000-2

332-290

乱れ雲

藤井　瑞枝／著

M45
EAG-0311